

目的 被服は着用者の非言語象徴のひとつであると言われてるように、人間相互間のコミュニケーションの中で被服の持つ役割は少なくない。特に、人格や性格などを知る上で大きな手掛かりとなることが多い。そこで被服に関連する質問を作成し、Y G性格テストと同時にアンケート調査を行ない、これらの関係について23の知見を得たので報告する。

方法 調査内容は、①Y G性格テスト検査による12の性格尺度の5つのプロフィールによる類型。②被服に関する一般的な質問(5段階S D法)105項目、トータルイメージ、被服のシルエットや模様、嗜好性、アクセサリ、ヘアースタイル、化粧などについて連続形式回答によるもの22項目、非連続形式回答によるもの23項目で合計150項目とした。調査対象者は女子大生120名で、調査日は昭和62年7月9日である。

結果 ①Y Gの単純集計より、調査対象者はほぼ中庸をとり、神経質でなくのんきであり、あまり思考せず、社会的接触を好む傾向の学生が多かった。②被服のシルエットでボディコンシャスを好む学生は「自分の服装を人は結構見ていると思う」「洋服のどこかに必ず流行を取り入れることを意識している」「ファッションモデルのように人前で歩いてみたい」などの質問に肯定的であることから、おしゃれで流行に関心の高い学生と言える。これらを性格との関係からみるとボディコンシャスが好きな学生は劣等感が少なく、ゆったりした被服が好きな学生は劣等感が大きいという傾向にあった。また、スカート丈の好みについても、その人の性格が、被服に対する嗜好や態度や行動に現われることが明らかになった。